

研究ノート

パロディはマッサージュである

パロディ研究とメディア論の接続にむけて

片山 淳

The Parody is the Massage

Exploring a Study of Parody as Extensions of Media Theories

KATAYAMA Atsushi

Abstract

This paper examines the possibility of introducing a media theory perspective to the study of parody. Linda Hutcheon's *A Theory of Parody: The Teachings of Twentieth-Century Art Forms* frequently resonates with Marshall McLuhan's media theory discourse. Notably, both Hutcheon and McLuhan were scholars at the University of Toronto, and beyond this institutional connection, they share a profound commonality in their perspectives on human expressive activity and creativity. By integrating media-theoretical frameworks into the study of parody, this paper argues that new and transformative horizons for the field may emerge.

1. はじめに——問題関心と考察の背景

リンダ・ハッチオンの『パロディの理論』（1985=1993）の第1章「序論」は、米国の政治・文化評論家であったドワイト・マクドナルドの引用から始まっている¹。

私たちは後ろを振り返りながら先に進もうとしている。
パロディこそがこういう時代の中心的表現方法である。

同著を通じてハッチオンが試みているのは、それまでの批評や嘲笑の「手法」としてのパロディに対して、その現代におけるあり方と、めざすものを解き明かす——いわば、パロディへの視座におけるアップデートを図ることだ。その試みを象徴する言説として、このマクドナルドの言葉が選ばれたことは納得がいく。

またこの引用文からは、マーシャル・マクルーハンの下記の言葉も連想されうるだろう。メディア論への基本的な知見を前提とすれば、不自然なことではないはずだ。

われわれはバックミラーごしに現在を見ている。

われわれは未来にむかって、後ろ向きに進行している²。

これは1967年に発表された『メディアはマッサージである』のなかの一文で、同著はグラフィックデザイナーでもあったクエンティン・フィオーレが、マクルーハンの言葉に視覚的な効果をくわえて構成された書籍である。そして前述の引用文は、人間が新しい技術や状況に直面した場合、過去の経験や既存のメディアの枠組みに依拠して物事を考えるということについて述べたものだ。

それまでもマクルーハンは、すべてのメディアの内容（コンテンツ）は、常にもうひとつのメディアであるとの論を展開している³。もしこの観点を芸術やエンターテインメントなどの創造的活動に絞って適応するならば、「過去の表現や知見のうえに成立してきた」という点で、ハッチオンが向き合おうとしているパロディに通じる面があるのではないだろうか。

時代は違えども、マクルーハンは同じトロント大学で教鞭をとっている（ハッチオンは現在名誉教授）。そこに安易な共通点やストーリーを見出すことは避けなければならないが、ともに文学評論に関連する分野の研究者であり、両者の視座の間接的な接点は興味深い⁴。

＊

筆者は広告におけるパロディという事象に、強く示唆的な関心を抱いてきた。それは広告におけるパロディに対して、面白さやインパクトといった表現上の効果とは別に、コミュニケーションにおける副次的なメッセージ性を有しているのではないかという印象をもっているからだ。ただし「副次的」とは、メインメッセージを補足することや、そのプラスアルファ的な情報という意味合いではない。物理的に明示されてはいないが、そこで行われているコミュニケーションのあり方を、音楽におけるコード進行のように示唆しているのではないかというものである。またこの感覚は、日本文学研究者のツベタナ・クリステワの「パロディ研究の可能性」にある下記の記述に近いのではないと思われる。

パロディは、パロディ当時の文化による原典の受容を明示するとともに、新しい価値観をも浮き彫りにしている。

要するに、パロディは、二重に「自己反射的」である⁵。

この「二重に『自己反射的』」という視点は、新旧の表現や創作における接続への指摘でもあるだろう。もしパロディという試みが、この「二重に自己反射的」な構造を内包しているのだとすると、その構図はマクルーハンが語った異なるメディア同士の関係性に通じるものではないだろうか。そしてパロディという試みの考察にあたり、メディア論の枠組みを援用していくことが可能であるならば、パロディを論じる新たな視点が提示できるのではないか——その手がかりを見出していくことが、本稿の目的である。

2. 後ろを振り返る探検者たちとバックミラー

ハッチオンが引用したマクドナルドの言葉は、1960年に出版された『Parodies: An Anthology』の序文（Preface）からの一節である。原文は「We are backward-looking explorers and parody is a central expression of our times」⁶であるが、この前半部分（We are backward-looking explorers）について、筆者としては「私たちは後ろをふり返る探検者である」という直訳的な解釈を念頭に考えてみたい。その理由は、「私たち」を「探検者」という言葉で規定することで、時代性とともに生きる（生きざるをえない）という立場を、よりの確に表現できるのではないかと感じるからだ。

つまり「私たち」は、生きていく方便として振り返ることを選び取っているのではなく、メディアをふくむ技術の進化のなかで、振り返ることがデフォルトとして組み込まれた行動のあり方を余儀なくされているのではないかということである。

マクドナルドは、同じくその序文のなかでジェイムズ・ジョイスの『ユリシーズ』からパブロ・ピカソの作品までの幅広い創作を例にあげたうえで、すぐれた芸術の仕事は過去の表現や知見のうえに成立してきたと述べている。もちろん前者はホメロスの『オデュッセイア』との対比を、また後者はアフリカの彫刻やギリシャの花瓶などの古代芸術作品、あるいは過去のピカソ自身をインスピレーションの源泉としてきたことをふまえての言及である。

しかしながらマクドナルドにとって、本来の芸術や文化とは、一定の高みを獲得した「High Culture」のことだ。そしてそれ以外に新たに登場してきたものは大衆の文化（Popular Culture）というよりも、大量に消費されるための文化（Mass Culture）であるとして、きびしく批判している⁷。

一方で、そこから「連想されうる」マクルーハンの言葉であるが、出典の当該箇所全体では、下記のような記述がなされている。

過去はあっちに去っていった。まったく新しい状況に直面すると、われわれはいつも、一番近い過去の事物や様式にしがみつくものである。

われわれはバックミラーごしに現在を見ている。われわれは未来に向かって後ろ向きに行進している。郊外の住民は、想像のうえでは、西部劇〔引用者：「西部劇」に「ボナンザ」のルビ〕の地に住んでいるのである⁸。

この『メディアはマッサージである』の当該ページには、トンネルのような空間を走る自動車のバックミラーに、まるでアメリカの西部開拓時代を思わせるかのような馬車のシルエットが映り込んだ画像が使用されている。つまり自動車という新たな技術の理解は、馬車という古い技術を通じてなされているという示唆であろう。

＊

マクドナルドとマクルーハンは、ほぼ同じ時代に近接する分野での研究や言論活動をおこ

なっていた。文学評論の分野においては、両者ともに『フィネガンズ・ウェイク』に着目するなど、その視野には共通する部分もあったはずだ⁹。

しかしその文化や社会に向き合う眼差しとして、マクドナルドはややスノビッシュな立ち位置をとっている。それは前述の『パロディ』についての記述でも、『ユリシーズ』や『荒地』などの「古典的名作」との関係性において、パロディの意義や評価を述べていることからもうかがえる¹⁰。一方でマクルーハンは、メディア技術の進化を通じた文化や社会の変化を、ある意味で必然的にとらえ、創作としての質や評価とは異なる次元で、その意味するところを積極的に読み解こうとしている。両者のスタンスは、まずそこから異なっているわけだ。

実際にマクドナルドは、マクルーハンの『メディアの理解』に対するさまざまな応答を集めた書籍『McLuhan: Pro and Con Man』のなかで、その印象について「矛盾、非連続性、歪曲された事実および事実でない事実、そして誇張の集積」¹¹といった批判的な見解を述べている。

アメリカの「大衆文化」の広がりに対して、基本的に「低俗なマスコミ文化（masscult）」と批判的な姿勢をとったマクドナルド¹²と、テレビをはじめとする新しいメディア技術の影響と示唆を積極的に論じていったマクルーハンは、同じ出発点から別の方向に向かってすすんだ論者であったともいえるだろう。しかし本稿ではその違いではなく、そんな両者に共通する、過去からの文化的あるいは表現的な連続性という視点に着目する。そのひとつの現れこそ、ハッチオンが対峙したパロディという概念なのだ。

3. ハッチオンの視座——ポストモダンとマクルーハン

ハッチオンの『パロディの理論』では、前述のマクドナルドを引用した序文をうけて、同著が取り組む問題意識と論考の主旨が述べられている。それは「現代の芸術活動を理論づける方向を示そうとする研究」であり、ポストモダンの社会では「芸術の諸様式はますます外側からの批評に不信感を抱くようになり、自分の構造の中に批評的註釈を取り込んでいこうとしている」というものである。

この「芸術」を語るための補助線として着目したいのが、他の学術分野においても「自己言及は関心の的となっている」¹³や、「現代芸術様式に見られる自己再帰性は往々にしてパロディの形をとり、その場合に芸術作成過程の新しい型を生み出すことになる」¹⁴といった記述である。これらの言葉からは、ハッチオンがパロディという事象を考えるにあたり、自己言及や再帰性という概念に着目して、より構造的にとらえようとしていることがうかがえる。

ポストモダンの社会における芸術との向き合い方という点では、そのアプローチも興味深い。ハッチオンは「現代のパロディを考えるためには、実際の芸術作品にあらわれた表現の性質や機能をまず第一に知らなくてはならない」と述べたうえで、「つまり、ロシア・フォルマリストのやったことをさかさまにしてみたいのだ」との意向を表明している¹⁵。

また「ポストモダン」についての議論は本稿の射程を大きく超えてしまうものであるが、その従来のアカデミズム的視野では十分に扱われてこなかったポピュラー文化なども包摂する領

域横断的精神を活性化し、さまざまな事情を持つ当事者に固有の具体性と抽象性のバランスを試みる実験的考察¹⁶という点では、パロディという脈流との接点を見出すことができるだろう。

これらの視点は、パロディへの多角的な考察をへて、最後の第六章の「結論」における「わたしは今日のパロディを差異をもった反復と定義したので、不可避免的にポスト構造主義の反復の性質に関する論争にすっぽり入ったことになる」との一文に着地する¹⁷。ハッチオンがめざすところは「二〇世紀のパロディと名付けようとしているもの」をあぶり出すことであり、「標準的な辞書の定義にあるようなただのふざけた模倣」といった旧来のパロディの定義の更新である¹⁶。その結果として、現代の芸術や創作活動の成り立ちや本質を読み解くフレームへの視座として、パロディ研究自体を再定義しようとしているわけだ。

アンソニー・ギデنزは、「再帰性は、システムの再生産の基盤そのもののなかに入り込み、その結果、思考と行為とはつねに互いに反照し合うようになる」と述べた¹⁹。ハッチオンが論じようとしている現代のパロディとは、表現としてのアップデートではなく、ポストモダンという時代自体が要求した、あるいは選び取った表現の方法論ではないだろうか。

＊

では、そのハッチオンの視座には、何が写し出されていたのか。マクルーハンが1970年にカナダの詩人ウィルフレッド・ワトソンと共著で出版した『From Cliche to Archetype』には、まさに「パロディ」と題された章がもうけられている。そこでマクルーハンは、「類似表現（原文では simile：引用者注）のような生ぬるさを有するものも、比喻（原文では metaphor：引用者注）のごとき力をもつものもある」と述べている²⁰。

同著の主題は、「決まり文句」が表現における「原型」として変化あるいは昇華されることへの考察である。たとえばジェームス・ジョイスの『フィネガンズ・ウェイク』が有するテーマのひとつは「過去の時間は娯楽である」であり、これは決まり文句から原型への逆説的転換の理解に役立つものと述べる（原文の“past time are pastimes”は、韻を意識した文言であろう）。そしてその考察は、20世紀において利用可能な「過去の時間」は文化的無秩序を生み出すほど膨大であると導かれる²¹。もし膨大な「過去の時間」が効果的に利用されることで「比喻のごとき力」をもつとするならば、現代におけるパロディとして機能するものであるはずだ。そしてそれは、前述のハッチオンの再定義の対象ともなりうるものではないだろうか。

もちろんハッチオンの視座は、マクルーハンのそれをそのまま踏襲するものではない。『パロディの理論』には、『From Cliche to Archetype』で述べられた古典的な文学作品の読み解きに疑問を呈する記述もある²²。しかしミクロ的視点での差異の重要性に留意するとともに、マクロ的観点から両者を俯瞰して接点を探していくことは、研究における新たな切り口の発見につながるはずだ。

前述したハッチオンの「さかさま」は、「現代のパロディの存在と重要性」に目を向け、「その現象を最もうまく説明してくれるような理論」を考えていくという意志表明でもあるはずだが、同時にマクルーハンの「過去の時間は娯楽」や「バックミラーを通して現代を見る」とも、時間軸の導入という点でも響き合うものだ。とらえ方としては逆方向のようでもあるが、表現や創作の構造を考察するにあたっては、通底するものがあるのではないか。現代のパロディの

再定義というハッチオンの試みには、文学論とは異なる基準が必要となってくるように思われる。その解のひとつを、メディア論に見出すことも可能ではないだろうか。

4. マクルーハンの視座——「新しい技術」への不安と応答

マクルーハンについて考えるということは、その散文的な記述のなかから、恣意的とならないことに留意しつつ、問いへの手がかりを読み出していくことだと筆者は考える。その意味で本稿の視座は、いくぶん再解釈的なものになってしまうかもしれない。ただし学術的正確さへの懸念をいだきつつも、まずは思考をすすめていかなくは、マクルーハンを現代に活用することは難しいはずだ²³。

前述の「バックミラー」は、おおむね古い技術と新しい技術との関係性への示唆ととらえられることが多い。そしてその対象は「古いメディアと新しいメディア」と読み換えることが可能だろう。マクルーハン（1964=1967）の序文には、マクルーハンによる下記のような記述がある。

「メディアはメッセージである」ということは、電子工学時代という形で、まったく新しい環境がつくられたということである。この新しい環境の「内容」というものは、工業時代の機械化された古い環境である²⁴。

この一節は、テレビの「内容」は映画である、といったメディアとコンテンツの入れ子構造への言及にもつながっていく。しかしマクルーハンは、それを考察の対象として第三者的にとらえるだけでなく、人間のあり方への懸念という観点も提示している。たとえば『メディアはマッサージである』には、人間がメディアの変化に直面して覚える「不安」への指摘が顔を覗かせる。

技術と文化が大きく移り変わる時代には、数え切れない混乱と深い絶望がつねに生じるものである。現代が「不安の時代」である原因は大部分、今日の仕事を昨日の道具——昨日の概念——でこなそうとしているためである²⁵。

当該箇所の前には、アルフレッド・ノース・ホワイトヘッドの「文明の主たる進歩は、既存の社会をほとんど難破させるようなプロセスである」²⁶ という一文が引用されている。もしかしたらマクルーハンは、メディア技術の変化という事象を読み解くだけではなく、その際に生じる混乱への解を見出そうとしていたのかもしれない。マクルーハンの「高弟の一人」とされるジョン・M・カルキンが述べた「マクルーハンは、現在を現在の目でもって見る人がほとんどいず、たとえいたとしても現在をバックミラーでのぞいて過去に還元し、それによって現在を見失っていると考える」²⁷ も、この懸念を示唆するものだろう。

こういった言説からうかがえるのは、マクルーハン自身の問題意識である。しばしば「技術決定論者」としての批判がなされてきたマクルーハンであるが、その著述には教育のあり方に関わる内容も散見され、決して人間としての向き合い方をないがしろにしているわけではない。その他にも、メディアが変化する時代を生きる子供たちに対するマクルーハンの関心は見出すことが可能だ。たとえば「集積された電気情報がもたらす現代の家庭環境」という観点から述べた、「今日の子どもは不条理に成長する。彼らは二つの世界に生きていながら、そのどちらの世界も彼らを成長へと向かわせないからである」²⁸といった記述である。

したがってマクルーハンが提示した「バックミラー」の概念には、単にメディアの変化への学術的分析だけでなく、そこに内在する課題の指摘が含まれていると考えられるだろう。たとえば若者の学びの機会については、「バックミラー社会によって彼らの眼前でピシャリと閉められてしまった」²⁹との懸念を示している。

この「バックミラー社会 (rear-view-mirror society)」もまた、変化による不安や文化的な切断の示唆といえるのではないか。ではこういった懸念への応答として、何が可能であるのか。たとえばマクルーハン&カーペンター (1960=1967) には、下記のような記述がある。

新しいメディアは、われわれを古い「リアルな」世界に関連づける手段となるものではない。それ自身がリアルの世界なのである。それは残っている古い世界を意のままに再編成する³⁰。

「意のままに再編成する」プロセスは、新しい技術やメディアを理解し、使いこなしていくという過程でもあると同時に、表現における「複製」という行為も想起させる。メディア研究者の山口 (2022) は、ベンヤミンの複製技術時代についての論考をふまえ、「複製」を「メディアにとってもっとも本質的なもの」との見解を表明している³¹。メディアを考えるということは、「複製」が意味することについても考えることでもあるだろう。

この「再編成」に対して、筆者はパロディという枠組を参照したいと考える。マクルーハンが感じた、メディアの変化が引き起こす人間の不安への応答を論じていくために、パロディという事象をメディア論の文脈で考察していくことにも一定の理があるのではないだろうか。

5. まとめとして～課題と今後への展望

本稿は、表現活動におけるパロディという試みについて考えるなかで、ハッチオンの引用からのマクルーハンへの想起をきっかけに立ちあがってきたものである。当初その「想起」は、学術的に近い分野では起こりうる一種の偶然のようにも感じられ、その根底に考えをめぐらせるには至らなかった。その一方でハッチオンの考察を読み込むにしたがって、メディア論的な視点を感じるようになってきた。理論的視座としてのメディア論と、表現の可能性における

パロディ研究の両者がともに語られることは、管見の限りでは多くない。今後の考察においては、このパロディ研究とメディア論の接続から何が見出せるか、そしてなんらかの理論的枠組みを提示できるか問うていきたいと考える。

ただし本稿で記述できたのは、あくまでもその起点にすぎない。まず着手すべきなのは、関連する文献や書籍をより詳細に検証し、個々の知見を新たな観点から組みあげていくことだろう。哲学研究者の千葉雅也は、ソーシャルメディアの X (旧 Twitter) に、こんな投稿をあげている。

ChatGPT とは、突然出現した未来的存在なのではない。それはひと言で言えば、過去である。だが、その過去の膨大な塊に問いかけると、そこから、いくばくかの未来が剥がれ落ちてくるかのような気がする³²。

確かに ChatGPT 等の生成 AI による「創作物」は、過去の膨大な情報のうえに成り立つものである。そしてそれらの情報は、テキストであれ画像やオーディオであれ、なんらかのメディアとして取り込まれることになる。その意味では、生成 AI は新しいメディア体験であるということもできるだろう。

しかし一方で、その「AI 時代」においてパロディは可能なのか？筆者の AI についてのごく初歩的な知識からは、プロンプトというある種の「創造的手続き」を経ることで、それは実現するのではないかと考える。そして、そこにクリエイティビティは介在するのかと問うことは、広告制作における生成 AI を使ったコピーやビジュアル作成の試みに、一定の視座を寄与することでもあるはずだ。

いささか先を急ぎすぎるかもしれないが、パロディ研究へのメディア論における時間的視点の参照、そしてその広告コミュニケーションへの応用について掘り下げていくことは、生成 AI を含めての今日のコミュニケーション環境を考える手がかりともなるのではないか。そしてあらためて広告に還元していくことで、広告コミュニケーションにおけるパロディの機能（表現的なおもしろさという点ではなく）を再定義していきたいと考える。

註

¹ ハッチオン (1985=1993) p.5。マクドナルドについては、p.67 に「アメリカの政治・文化評論家」との註記がある。

² マクルーハン (1967=2015) p.76

³ マクルーハン (1964=1967) p.15 「つまり、すべてのメディアの『内容』〔引用者：「内容」に「コンテンツ」のルビ〕はつねにもう一つのメディアである。」

⁴ 『パロディの理論』には『From Cliche to Archetype』での記述への言及もある (184-185)。またマクルーハンに関する Elena Lamberti の論考『Marshall McLuhan's Mosaic: Probing the Literary Origins of Media Studies』の謝意 (Acknowledgement) には、著者のハッチオンへの感謝が述べられている。
<https://mcluhangalaxy.wordpress.com/2012/03/21/a-book-launch-marshall-mcluhans-mosaic-by-elena->

lamberti/ (最終閲覧：2025/01/17)

⁵ クリステワ (2008) p.2

⁶ Macdonald (1960) p.XV

⁷ Macdonald (1953) p.1

⁸ マクルーハン (1967=2015) p.76-77

⁹ McLuhan & Watson (1970) p.9 / Macdonald (1960) p.XV

¹⁰ Macdonald (1960) p.XV

¹¹ Rosenthal (1968) p.32 (原文は”accumulation of contradictions, non-sequiturs, facts that are distorted and facts that are not facts, exaggerations”)

¹² Macdonald (1953) p.1

¹³ ハッチオン (1985=1993) p.5~6

¹⁴ ハッチオン (1985=1993) p.7

¹⁵ ハッチオン (1985=1993) p.10~11

¹⁶ 千葉雅也 (2020) p.74-75

¹⁷ ハッチオン (1985=1993) p.229 (この最終章のサブタイトルである「世界、パロディ、理論家 (The World, the Parodic Text, and the Theorist)」は、エドワード・サイードの1983年の著作「The World, the text, and the Critic」の「(パロディ的) 焼き直し」であるとハッチオン自身が p.227 で述べている)

¹⁸ ハッチオン (1985=1993) p.15

¹⁹ ギデンズ (1990=1993) p.55

²⁰ McLuhan & Watson (1970) p.169

²¹ McLuhan & Watson (1970) p.99

²² ハッチオン (1985=1993) p.184

²³ その意味で筆者の観点は、門林 (2011) p.18 の、教条主義的なフレームを押しつけるような読み方から自由になったとき、どのような可能性を汲み取ることができるか、という「態度」と近いだろう。

²⁴ マクルーハン (1964=1967) p.iv

²⁵ マクルーハン (1967=2015) p.10

²⁶ マクルーハン (1967=2015) p.8

²⁷ マクルーハン&カーペンター (1960=1967) p.3※本編の「マクルーハン理論とは何か」のページか

²⁸ マクルーハン (1967=2015) p.20

²⁹ マクルーハン (1967=2015) p.102

³⁰ マクルーハン&カーペンター (1960=1967) p.59

³¹ 山口 (2022) p.17

³² <https://x.com/masayachiba/status/1871405584916090883> (最終閲覧：2024/12/24)

引用文献

アンソニー・ギデンズ『近代とはいかなる時代か？ モダニティの帰結』松尾精文・小幡正敏訳、而立書房 (1993)

- 門林岳史「100年目の入門 マーシャル・マクルーハン思想」『マーシャル・マクルーハン 生誕100年 メディア（論）の可能性を問う』河出書房新社（2011）
- 千葉雅也「ポストモダン、あるいはポスト構造主義の論理と倫理」『西洋哲学史8 現代グローバル時代の知』伊藤邦武他編 筑摩書房（2020）
- ツベタナ・クリステワ「パロディ研究の可能性」『中世文学』中世文学会（2008）53(0), p.1-4
- マーシャル・マクルーハン『メディアはマッサージである』門林岳史訳、河出書房新社（2015）
- マーシャル・マクルーハン&エドモンド・カーペンター『マクルーハン理論』サイマル出版（1967）
- 山口裕之『現代メディア哲学 複製技術論からヴァーチャルリアリティへ』講談社（2022）
- リンダ・ハッチオン『パロディの理論』辻麻子訳、未来社（1993）

Macdonald, Dwight. "A Theory of Mass Culture" Diogenes. 1953;1(3):1-17 (1953)

"Parodies: An Anthology from Chaucer to Beerbohm – and After" Random House, New York (1960)

"Masscult and Midcult: Essays Against the American Grain" Ed. by John Summers, New York Review Books, New York (2011)

McLuhan, Marshall, and Fiore, Quentin "The Medium Is the Message" London. Penguin Books (1967/2008)

McLuhan, Marshall, and Watson, Wilfred "From Cliche to Archetype" New York. Viking (1970)

Rosenthal, Raymond (Ed). "McLuhan Pro & Con" Penguin, Baltimore (1969)